様式 5:終了時活動報告書

2024年3月5日

世界の人びとのためのＪＩＣＡ基金活用事業
終了時活動報告書・ニュースレター用報告書（2023 年度採択案件）

１．業務の概要	
（１）案件名	2023 年度採択世界の人びとのための JICA 基金活用事業 「ザンビア共和国 AIDS 孤児のための初等教育及び給食支援」
（２）実施団体名	特定非営利活動法人　礎の石孤児院
（３）実施期間	2023 年 10 月 2 日～2024 年 2 月 29 日
（４）実施国	ザンビア共和国
（５）活動地域	ルサカ州ルサカ県ルサカ市ンゴンベ貧困区

（６）活動概要

①活動の背景：

礎の石ザンビア孤児院(現地登録名:Cornerstone of Hope) は、 2019 年、スラムにおける学校運営を始めた。

当初は農村地域(チョングェ)で活動していたが、活動の拠点を首都ルサカに移転し、約 10 年間ストリートチルドレンのためのシェルターを運営し、保護養育活動を行ってきた。

数多くのストリートチルドレンを保護する一方、ドラッグ中毒等の影響を受けた子どもたちが路上生活に戻っていく姿を目の当たりにし、一度路上生活を経験した子ども達の更生が、如何に困難であるかを痛感させられた。

そこで、子ども達が路上生活を始める要因である主要な 3 点「家に食べ物がない」「学校に行かせてもらえていない」「虐待」という状況に関与し、支援する事によって、子ども達が路上生活を選ぶ事を抑止し、健やかな成長と、将来的には家庭が貧困から脱却していけるように支援している。

当校では現在、ベビークラスから 8 年生(日本の中学 2 年生)まで、 約 87 人が学んでいる。受け入れ対象児童は、HIV /AIDS によって親を失った、あるいは本人も陽性で、かつ極度の貧困状態にある孤児を優先させている。

家庭においては一日一食さえ難しい子どもが多いため、学校では朝 食と昼食を提供している。またそれは、HIV 陽性者が毎日服用しなければならない ARV（抗レトロウィルス）の副作用（特に空腹時の服薬）から子どもを守り、学校において安心して、楽しく学べるようにという配慮も背景にある。特に HIV 陽性の子どもにとって、『食べさせる事が、命を守る事』と認識しており、栄養バランスと健康（メンタルヘルスも含む）に注意している。

②活動の目標：

主にスラムにおける孤児を対象に、初等教育及び、給食（朝食・昼食）の提供を支援する事によって、路上生活を選択することを抑止し、健やかな成長と将来的に貧困から脱却し自立した生活を営むことを目指す。

2. 業務実施結果

（1）実施した内容：

1、 初等教育及び中高等教育

月曜日～金曜日まで週5日、ザンビアのカリキュラムに沿った授業を行った。時にボランティアの力を借りながら、ゲームやクリスマスパーティーなどを行う事ができた。

残念な事に、雨季に入ってのコレラの流行により、1月から2月にかけてほぼ1ヶ月間、全ての学校の閉鎖が決定されたが、2月12日より開校する事ができ、子ども達が元気に通学できるようになった。また、12月には待望のJICA海外協力隊員が着任し、開校と同時に1年生の授業担当やマネージメント業務等に参加して、大きな力となってくれている。

2、 給食(朝食・昼食)の提供

開校されている期間、毎日欠かさず朝食と昼食を全員に提供できた。特に栄養バランスが偏らないように、肉、野菜や果物もメニューに加える事ができた。

ザンビアは物価高が続いていて、主食のミルミル(トウコロコシ粉)の価格がかつての倍の金額になるなど、大きな問題になっているが、助成金を頂いているお陰で、何とか乗り切る事ができている。家庭では食事を食べれていない多くの子ども達は、給食を非常に励みに学校に来ていて、朝食、昼食時には笑顔が弾けている。

3、 コミュニティエンパワーメント

(1) メンタルヘルスケア

月2～3人の母親達に、有資格のカウンセラーが対応した。カウンセリングに来ない多くの女性達(母親達)が、アルコール中毒の問題を抱えているが、本人がその問題に気付いておらず、深刻な健康上の問題に至っているケースが見られている。

(2) 孤児家庭への緊急及び一時的食糧、医療費支援等

遺伝的疾患である鎌形赤血球貧血症の問題を抱える子どもが重篤な状態に陥り、輸血が2回必要となった。しかしながら輸血用血液の不足の問題も起き、ドナーを募る他、入院費、食費等の支援を行った。幸い輸血によって回復し現在は元気に通学できている。夫が精神病を発症して行方不明になり、以来母親がひとりで5人の子育てをしている(内2人が当校に通学)家庭への緊急食糧支援を2回行った。末っ子の女児が心身に障害を抱えているため、安定した仕事に就く事が困難で、困窮しがちである。今後、自営への支援、女児のためのデイサービス等確保が必要である。

別のシングルマザー(5人の子どもたちが当校で学んでいる)は、かつて夫からの凄惨な暴力を受け、その後夫が家出してからは、ひとりで5人の子どもの養育の重圧に喘いでいた。PTSDを発症して、カジュアルワークさえ困難で、家賃を払えずに家を追い出され行き場を失っていたため、当校の一室を開放して居住していた。専門医師によるカウンセリングを受けるための医療費や、本人のストレスにならない程度でも収入を得られるように支援してきた。しかしながら、病状には波があり、長期的な視野での支援を継続していく予定である。

4、中高等学校建設プロジェクト

2 月に全校舎の内の一部が完成したため、12 日に開校し、ンゴンベの 9 年生 11 人が通学できるようになった。制服も一新し、スラムの環境とはまた異なる学校での学びを子ども達は楽しんでいるようである。

来年からは、地域の一般生徒を有料で受け入れ、その利益を原資として、引き続きスラムの子ども達が無料で教育を受けていけるようにする計画である。

しかしながら、まだ校舎 2 棟の建設(建設費用 5 千万円以上必要)が残されており、引き続き資金集めのための努力をしていく。特に現在、2 名のボランティア達と共に、SNS を中心に広報活動を強化しており、2024 年中の校舎完成を目指している。

（２）実施成果：

コレラの流行により、ザンビア全土で学校が１～2 月まで約 1 ヶ月間閉校されたが、それ以外は滞りなく活動を実施できた。特に、87 人全員が最終試験をパスして新年より進級できる学力を持つに至ることができたのは快挙であった。

特に昨年より、識字力を改善するために絵本を活用していて、毎月読み聞かせコンテストを学年毎に実施し、優勝者に景品(ささやかな)を贈呈するなどの取り組みを行った事も、子どもたちにとって、よりモチベーションが高まったのではないかと考えている。

家庭においては 1 日 1 度の食事もままならない子どもたちは、朝食と昼食の２食の給食を励みに通学している。現在ザンビアでは物価の上昇が続いており、特に主食であるシマの原料であるミルミル(トウモロコシ粉)の価格が、かつての倍以上に至り、庶民、特にスラムに住む貧困層には到底手の届かない程高額になり、生活を圧迫しているため、学校での給食は今まで以上に重要な役割を果たしている。

（３）得られた教訓など：

事業を進める中で、スラムの家庭状況を知るために、家庭訪問を積極的に行った。その結果、夫が精神病発症して失踪した上に、重度の障害を持つ子どもがいるために、安定した職に就けない母親、子どもの父親が家出し、乳児を含む 2～3 人の子どもを 1 人で養育しなければならないシングルマザー達、かつて夫から壮絶な DV を受けて、PTSD を発症しながら、5 人の子どもを養育しなければならない母親など、自分の力だけではどうにもできない状況に置かれている母親たちを多く知る事になった。このような問題の延長線上に、アルコール中毒や売春、そして HIV 感染、虐待や自死等が現れているのであろうと推察している。実際、ストリートチルドレンの母親の多くが、これらいずれかの問題を複数抱えているケースがほとんどである。

子ども達は、この様な困難な親の状況を間近に見ながら、幼いながらに少しでも早くお金を稼いで家族を支えなければというジレンマに陥っていく。特にティーンエイジの男の子にその傾向が強く、学校に来る事よりも、何らかの単発アルバイト(バーで肉を焼く、工事現場で水汲みをする等)を選んでしまうのである。

そのため、子どもたちが安心して継続して教育を受けるためには、こういった母親たちの、精神面と経済面双方を向上させていくための支援が急務であると痛感させられている。

（４）今後の活動・フォローアップの方針：

今後も継続して学校運営を行なっていく。フォローアップを含め、現地活動は現地駐在の日本人ディレクターを中心に行われる予定である。

「世界の人々のための JICA 基金」「ゆうちょ財団 NGO 海外援助活動助成」の上限を使い切ってしまったため、今後はさらに広報活動に力を入れて、活動継続に必要な資金を集めていく事とする。

特に 2024 年度中に、セカンダリー(中高等学校)の残りの校舎建設費用(5～6 千万円)を作り、2025 年 1 月までには開校できるように建設を進めたいと考えている。そのため、協力隊員にプライマリー（初等学校）のマネージメントも含めた活動を担って頂き、現地ディレクターはセカンダリーの建設費用や更なる土地購入、シングルマザー支援センター設立のためのファンドライズ業務をメインに行なっていく事とする。

2023 年 3 月には、日本の大学生が 4 ヶ月間インターンとして参加予定であるため、このインターンにも、セカンダリーをメインとしながらプライマリーでも週一授業担当してもらう予定である。特に、スラム内部にあるプライマリーにも参加することによって、貧困の実情を肌で体験し、理解を深める事は、国際協力の道を考える上でも役立つであろうと期待している。

３．その他(エピソード・感想・写真など)

（１）活動中のエピソード・感想など

昨年度に新規雇用した教員 3 人について、全員が非常にコミットしていて、日々努力しながら子ども達の教育に関わってくれた事は、非常に大きな助けになった。しかしながら、その 3 人共も、それぞれに過酷な幼少期を送り、現在も様々な問題(主に家族、親族間の)への対処に苦しんでいる様子が見て取れている。

支援を受ける子どもだけでなく、支援する側のスタッフへのエンパワーメントも相当重要である事、また、貧しい幼少期という事だけが理由ではないにしても、父母に愛され、守られて、経済的にも安定した生活を送るという「普通」の生活が、この国ではかくも稀有な事なのだと、改めて感じさせられた。

（２）活動の写真

小学校授業風景

絵本の読み聞かせ

給食風景

給食風景

困窮するシングルマザー（中央）家庭訪問

重度の障害児を育てるシングルマザー

セカンダリー（中高等学校）開校式

セカンダリー授業風景

（３）JICA 基金活用事業を実施したことで団体の成長につながった点・良かった点

JICA 基金活用事業の実施により、物価が上昇する中においても、安心して子どもたちに必要な支援を与え続ける事ができた。特に給食を提供する事は、私たちの活動の根幹を成す大切な働きであるため、非常に感謝している。

また、セカンダリースクールの開校など、働きが増えてきている中で、JICA 本部の担当者の方、在ザンビア JICA 職員の方々からは、質問等に際して常に素早い返答やアドバイスを頂け、寄り添って頂けた事は本当に有り難く、心強く感じられた。

私たちが団体として成長していくためには、現地スタッフたちの成長が不可欠であるが、ともすれば、給料をもらうために、「仕事だけ」すれば良いという意識を持ちがちなスタッフたちが、子どもたちの家庭の問題に寄り添い、共に解決を目指そうという気持ちになってくれるかは、リーダー達の日々の姿勢が問われるように認識している。

そういった点で、特に異文化の中で進められる事業においては、謙虚に学ぶ姿勢と、日本ではあまり考えられない問題に私生活で日々対処しているスタッフ達への理解と配慮をしながら信頼関係を築き、そしてようやく発展思考で共に進める事ができるのだと学ぶ事ができた。

以上